

リードオルガンの復権を目指すワークショップ

足踏みオルガンとキリスト教

明治のXマス唱歌

100年の時超え再現

upp「京都に風の音を響かせよう」第3回は「足踏みオルガンと一緒に来た京都のクリスマス」をテーマに開かれた。

日本が鎖国を解き、最初にキリスト教の窓



口となったのは函館、東京、大阪、神戸、長崎などの港町だった。ところが京都は内陸にもかかわらずいち早くキリスト教が入ってきた。ナビゲーターを務めた安田寛・奈良教育大教授はその理由を「同志社の創立者・新島襄が、米国留学中に田中不二麿らの文部省



どことなく教会の雰囲気があったのはクリスマスソングのせい?

＝京都市上京区の毎日新聞京都支局ホールで

などに触れ、「いまは歌われることはない

後半では日本リード

た。【榊原雅晴】

次回は来月13日「八重とオルガン」

次回は1月13日(日)午後2時半、京都市上京区河原町通丸太町の毎日新聞京都ビル7階ホールで「八重とオルガン」のテーマ。八重は新島襄の妻で、来年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公。宣教師たちがいち早く持ち込んだオルガンを、新島と八重のように聴いていたのか。本井康博・同志社大神学部教授と大教授がエピソードを交えながら対談、ゆかりの曲を聴き歌う。定員80人。事前申し込み不要。無料。問い合わせは大森幹子(090・79622・9269)か滝本二郎さん(joint626@mail.com)。

いた」と説明した。そしてソプラノ歌手の酒井沃子さんがオルガンの伴奏で当時の賛美歌や唱歌を披露、100年の時を超え明治のクリスマスをやよみかえらせた。

「ちんし」「まがねの中」にうぶ声あげ、などの賛美歌や、ハッハの甘き音の「ちんし」、セザール・フランクの「二つのクリスマス古謡」など、クリスマスにちなむ曲を演奏した。